

イザヤ書53章「身代わりの傷」

1A 驚くべき御腕 1-9

1B 人々の蔑み 1-3

2B 痛みを負われた方 4-6

3B 虐げと裁き 7-9

2A 苦しみの後の満足 10-12

本文

イザヤ書 53 章を開いてください。今朝は、そのままイザヤ書 53 章に入りたいと思います。いつもは、午後礼拝に一節ずつの通読の学びをしています。けれども今日は、朝に一章分だけ一節ずつの学びをしています。ここイザヤ書 53 章の内容は、一言でいうならば「身代わり」です。主のしもべ、すなわちイエス様が、私たちの罪と咎のために身代わりになって傷を受け、死んでくださったということです。来週が復活節、イースターですが、私たちは今週、イエス様の受難を覚えたいと思います。イエス様が棕櫚の聖日、エルサレムにろばの子に乗って入られたのが日曜日ですが、それから数日後、おそらく金曜日だと言われていますが、その時に十字架に付けられました。その苦しみが全て、私の代わり、身代わりであったということを今朝は見ていきます。

1A 驚くべき御腕 1-9

私たちは前回、52 章 13 節から「主のしもべ」についての歌が始まっていることを読みました。これは第四の主のしもべの歌ですが、主が、世界の国々に公義をもたらす、教えが広まるというのが第一の歌でした。武力や圧力ではなく、公義によって、真実によって広まります。そして、神の言葉を語るのが第二の歌の内容です。本来は、神を敬わない国々をも滅ぼすことのできる力ある言葉なのですが、それを矢筒に隠してある矢のように神がされたとあります。つまり、少しずつ人々が立ち上がることができるように語られ、ある時にははっきりと語らず、人々に仕える姿であります。それゆえ、人々が彼を敬いません。力をもって強いるなら可能かもしれませんが、私たちの神は口ではなく、心から神をあがめてほしいと願われています。そうした姿が第二の歌にあります。

そして第三の歌は、主のしもべ自身が、神の弟子のようになること、主から言葉を聞き、主に命じられたことに服従する姿が書かれていました。「耳を開かれた」と書いてあります。それは、奴隷が主人に一生涯仕える時に、耳をきりで刺しとおすのですが、そのことを意味します。それで主のしもべは、打つ者に背中を任せ、侮辱されても、つばきをかけられても、自分の顔を隠さなかったと言っています。人々が神の真理に頑なで、侮辱を受けても、父の御心を行なっているので、それを拒まなかったということです。

そして第四の歌に入っています。52 章 13 節からです。この方が、天から戻って来られます。力

ある栄光に輝く方として戻って来られます。ところが、その顔つきがあまりにも崩れていて、あまりにも損なわれているので、人のようではなかったのが、国々が衝撃を受けます。王たちは口をつぐみます。この世界を救われる方、王の王、主の主である方は、なんと人々からのけ者にされ、打ち叩かれ、のけ者にされて、最後は殺された方であったということなのです。何をもちて救い主なのか？いろいろな救いがあるでしょう、今の状況からの救い、苦しみからの救いがあります。しかし神が提供してくださったのは、「罪からの救い」でした。「私たちの罪のために、私たちの咎のために、私たちの背きのために」という言葉が、53章には繰り返されています。

聖書では、キリスト教では、人の根本的な問題は、神に対する罪であると教えます。全てを支配している神に対して罪を犯したことが、すべての問題の根源であることを教えています。ちょうど一番上のボタンをかけ間違えると全てのボタンが間違えるように、すべての問題の元になっているのです。私たちの問題意識は、表面的なものです。これがいけない、あれがいけないと考えます。しかし、すべては神に罪を犯して、神から離れてしまったところから来ます。それが、この驚愕なのです。国々を救われる方が、人々の罪を身代わりに受けて顔を損なわれた方だったということです。

1B 人々の蔑み 1-3

1 私たちの聞いたことを、だれが信じたか。主の御腕は、だれに現われたのか。

ここの「私たち」とは、主が戻って来られる時に地上に残っているイスラエルの人々です。あまりにも驚いているのですが、その驚きの内容をここで言い表しています。「主の御腕は、だれに現われたのか。」と言っていますね。これは、イスラエルの民がエジプトから連れ出される時のその力強い神の腕のことであり、メシヤご自身を指しています(51:9)。その腕が現れているのですが、誰がこんなさげすまれる人の中に現れるのか、という驚きを言い表しています。

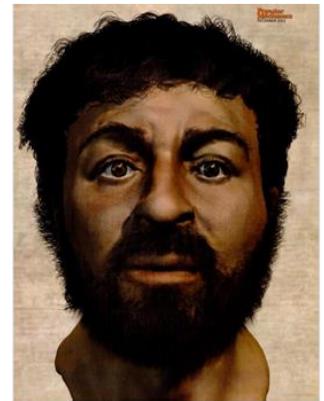
主イエスが地上におられるとき、ユダヤ人たちはメシヤがローマの支配から解放して下さる方であると信じていました。したがって、その力は軍事的なもの、政治的なものであると思っていました。それで、イエスがそのような方ではないことを知って、拒みました。ヨハネ 12 章に、この箇所を引用してヨハネがこう証言しています。「イエスが彼らの目の前でこのように多くのしるしを行なわれたのに、彼らはイエスを信じなかった。それは、『主よ。だれが私たちの知らせを信じましたか。また主の御腕はだれに現わされましたか。』』と言った預言者イザヤのことばが成就するためであった。(37-38 節)」私たち人間も、何か自分に何かをしてくれるのではないかと期待して、救いを求めます。しかしイエスは、「あなたの罪、その自分中心のあり方を捨てて、わたしに付いてきなさい。」と言われるのです。それで数多くの方が、イエスに従うことをやめていっています。しかし、すべての回復は、罪を取り除くところから始まるのです。

2 彼は主の前に若枝のように芽生え、砂漠の地から出る根のように育った。彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない。3 彼はさげすまれ、人々から

のけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。

これは、主のしもべ、メシヤがどのように育ち、またどのような格好をしていたのかを示しています。「若枝」というのはメシヤの呼び名です。11章1節に、「エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。」とあります。しかし、その環境は苛酷なものです。「砂漠の地から出る根のように育った。」とあります。これは乾燥して、土がとても堅いところであります。イエスが育ったところは、ナザレという村でした。主が大人になってから、その会堂で律法を読まれて、ご自身がキリストであることを宣言しましたが、そこにいたユダヤ人たちは信じませんでした。むしろ、イエスを崖から突き落とそうとしたのです。あまりにももの不信仰で、多くの奇蹟が行なえなかったことも福音書には書かれています。私たちが、霊的にとても堅い地である、とても渴いていると感じているのであれば、そのような地で主は育ったということが分かります。

そして、イエス様は見とれるような方ではありませんでした。イエスについての映画では、イエス役を務める俳優がとてもイケメンですから、イエス様もイケメンではないかと考えてしまいます。最近でしょうか、イギリスの放送局BBCが、当時のガリラヤ地方にいるユダヤ人の頭蓋骨から、コンピューターグラフィックにして再現したものがあります。女性の方に聞かないと分かりませんが、どう考えてもイケメンとは言えない顔つきです。しかし、もちろんこれは想像ですが、しかしはっきりしているのは、「私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない。」ということです。



王の王として、ふさわしい方であれば、見た目が良いことにこしたことはありません。かつてイスラエルでは、背文のある、誰が見ても美しいサウルが選ばれました。いかにも王にふさわしい雰囲気がありました。しかし、彼は主に退かれました。そして、主はサムエルにエッサイの家から油注ぐ者を探すように言われました。長男のエリアブを見て、「彼こそが主に油注がれる者だ」と思いました。「1サムエル 16:7 しかし主はサムエルに仰せられた。「彼の容貌や、背の高さを見てはならない。わたしは彼を退けている。人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、主は心を見る。」 イエス様は、うわべで人から判断されていたので、「うわべでさばいてはいけない。」と言われました。しかし私たちはどれだけ、うわべで裁くことでしょうか？ 真の救いは、見た目やうわべでやってきません、心にあります。

そして主は3節にあるように、さげすまれました。のけ者にされました。悲しみの人で、人々の心や体の病も知っておられました。なぜこのような仕打ちを受けられたのでしょうか？ それは、そのような仕打ちを受けている人々と一つになるためです。そのような人々のところに、真の救いが近いからです。「私はこれまできちんとやって来たと思う。少しは、欠点はあったかもしれないけれども、それでも普通に暮らしてきた。」という人々の言葉をたくさん聞いてきました。イエス様は、「富

んでいる人は災いです。」と言われました。自負があるので、自分が罪人であることが分からないのです。ですから、さげすまれ、のけ者にされたような方を自分の救い主にしようなどと、思いもつきません。しかし、そうでない人、心を貧しくしている人、自分はもうだめだと思っている人、自分とはとことんまで心が汚い、頑なだと悟っている人、そう言う人は、自分の罪と愚かさのために主が身代わりに、犠牲となってこのような仕打ちを受けられたことを、神の愛、神の慈悲深さであることを知るのです。

2B 痛みを負われた方 4-6

4 まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。5 しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。

ここに、メシヤがそのような仕打ちを受けられた理由と目的が明確に書かれています。「私たち」という言葉が連続しています。私たちの病、私たちの痛み、私たちの背きの罪、私たちの咎であります。彼の病でもなく、彼の痛みでも、背きの罪でも、彼の咎でもありません。全てが身代わりです。私たち人間は、少しでも自分のしていないことを罪に帰されるなら、激しく反発するでしょう。自分は無罪であると主張するでしょう。しかし、主はその全てを行われました。ご自分には欺きや罪はないのに、罪人として罰せられたのです。しかもそれを、主はご自分の意志で、自ら進んでその道を選ばれたのです。ここに書いてあるように、「神に打たれ、苦しめられた」とあるように、それが父なる神の御心であることを知っておられたからです。「2コリント 5:21 神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあつて、神の義となるためです。」

主が行なわれたのは、身代わり以上のことです。交換をしてくださいました。私たちは罪人でありましたが、イエス様が罪人となってくださいました。そしてイエス様が義人でありましたが、私たちが義と認められました。自分の内にある、あまりにも汚れた着物があつて、それをイエス様が身に付けられて、イエス様が元々着ておられる、まばゆいばかりの白く輝く着物を私が着ているようになっています。これを恵みと言わずしてなんというのでしょうか！その交換を主は、ご自分の受けられた打ち傷と刺し通された十字架の釘でしてくださいました。主が受けられたその懲らしめがあつたので、私たちが受けなければいけない懲らしめを主が身代わりに受けられたので、私たちが主の平安を受け取るようにしてくださいました。主がご自分の体に傷を受けられたので、それが、私が受けなければいけない傷だったので、主の癒しが私のもとなりました。私が罪を犯し、私が罪による病を持っており、しかし主が罪となり病となってくださったのです。

ところで、この鞭打ちについて、福音書では詳しく書かれていません。一文に留まっています。しかし、ローマが罪人に対して行なった鞭打ちは、それは、それは恐ろしいものでした。四十回の鞭を受けます。目的は自白を強要するためです。その鞭には、鉛やガラスの破片が入っています。

罪人は、背中をすべてローマ兵に見せます。そして、鞭を打てば、ただ赤く腫れあがるのではなく、肉片がちぎれ取れるのです。大量の出血がでます。その失血で、途中で死んでしまう者たちもいました。そして、打ちどころが悪ければ顔にも鞭が当たります。だから顔も滅茶苦茶になります。イエス様は、こぶしで殴られたこともあります。この鞭打ちで人が目を背けたくなるほど、顔がぐちゃぐちゃになりました。そして私たちは、これが自分の身代わりのためなのだ、ということを受け入れるのであれば、その人には真の癒しがきます。自分の犯している罪によって痛めつけられている良心は、この打ち傷によって癒しを得ます。罪は確かに裁かれた、罰は確かに受けたのだ。この方が自分と同じ肉体において、受けられたのだ。そこから平安が始まります。

6 私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。

イスラエルの残りの民は、ありったけの罪の告白をしています。彼らにとって羊は身近な存在です。羊がどのような存在かを知っています。羊は一度迷うと、本当に元の群れのところには戻れません。そして自分で判断できません。前に崖があって、自分の前にいる羊がどんどん落ちていっているのに、本当に目の前の草しか目に入っていないから、いっしょに落ちていきます。自分たちはまさに、そのような存在なのだとして告白しているのです。

ここで「おのおの、自分かつてな道に向かって行った。」と言っています。弟子たちは、イエス様が捕えられた時にめいめい、見捨てて逃げてしまいました。それは、私たち人間の姿です。私たちはどこまで、自分自身を求める者たちでしょうか。自分の都合によって、自分の楽しみによって、神の御心を損ねていることに気づいてさえいません。しかし、そのように気づいてさえいないとき、神はすでに、この方に私たちの全ての罪を負わせたのです。そしてここで大事なのが、「すべての咎」です。一部ではありません、すべてです。これまで行なってきたことの全てであります。こんな恵み、どこにあるでしょうか。このことによって、私たちを罪から解放しようとしておられるのです。

3B 虐げと裁き 7-9

7 彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。ほふり場に引かれて行く小羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。8 しいたげと、さばきによって、彼は取り去られた。彼の時代の者で、だれが思ったことだろう。彼がわたしの民のそむきの罪のために打たれ、生ける者の地から絶たれたことを。9 彼の墓は悪者どもとともに設けられ、彼は富む者とともに葬られた。彼は暴虐を行わず、その口に欺きはなかったが。

主のしもべは、打たれて傷を受け、それからここにあるように、取り去られます。「しいたげと、さばき」とあります。これは、ローマの十字架刑を指しています。十字架刑は、殺人やローマへの反逆罪に定められた者たちが、決してそんなことをしてはならないと見せしめのために歩み出された、極刑です。ある注解から、それがどのような苦しみかを説明しているものを引用します。「シュタウ

ファが『十字架刑は古代の裁判のもっとも凶悪な発明であり、人間が人間の悪魔的な所業によってこむる最も苦痛の激しい拷問である』と評した…。ところが、悪魔的な二十世紀はこれを実験してみた。それはナチによってダッハウの強制収容所でユダヤ人に対して実験的に行われたのである。…いわば非常に徐々に首をしめ、窒息の直前にやめ、また徐々に首をしめることを、本人に自動的にやらして死に至らせる処刑方法だが、古代のそれはナチの実験よりもさらに残酷であった。というのは手くび(手の甲ではない)は釘で打ちつけられているから、腕まげで身体を持ち上げようとするれば恐ろしく苦痛であり、足で持ち上げようとするればこれまた釘で打ちつけられている。さらに股のところに『角』といわれる木が出ているから、力つきてぐったりと下って急速に窒息しそうになると、この角が体を支えてまた息を吹きかえさず。これを何時間も何時間もなるべく長くづけさせて、死の直前に何回も到らせる。そして最後に脛を折られると、力つきた身体は支えを失ってだらりと下がり完全に窒息死する。ヨハネによる『イエスと一緒に十字架につけられた第一の者ともう一人の者の脛を折った。しかしイエスのところに来て、すでに死んでおられるのを見ると、脛を折らずに、死をたしかめるために、一人の兵卒が槍でその脇腹を突いた』とあるのはこのことである。これを『十字架にかけて槍で突き刺す』と誤解しているらしい記述を見かけるが実態はそんな簡単な殺し方ではない。』¹



そして、メシヤはここにあるように、あらゆる告発を受けました。それらは全て根拠のないもの、全然証言として成り立たないものでした。ところが、口を開きませんでした。ユダヤ人の宗教裁判を受けている時、そうでした(マタイ 26:62-63)。ローマ総督ピラトの前でもそうです(ヨハネ 19:19)。口を開きさえするものなら、一気に主の無罪が晴れることでしょう。そして、ユダヤ人の裁判においても、ピラトの裁判においても、どちらにも不正がありました。そうでもしないと、この方を有罪判決にすることは到底できなかつたからです。しかし、主は父の御心を行なっていることをご存知だったので。そして終わりの日に、再臨のメシヤ、キリストに見えるイスラエルの民は、「彼の時代の者で、だれが思ったことだろう。彼がわたしの民のそむきの罪のために打たれ、生ける者の地から絶たれたことを。」と言いました。どうでしょうか、誰がこのむごい死に方をした二千年前の一人の男が、自分自身の罪のためにこのように絶たれたことを信じるでしょうか？彼らも同じ驚きを持っているのです。皆さんはいかがでしょう、これが聖書のメッセージです。イエスが死なれたのは、あなたの背きの罪のためなのです。

9 節に、「彼の墓は悪者どもとともに設けられ、彼は富む者とともに葬られた。」とありますが、これはどういうことでしょうか？悪者として葬られたのに、けれども富む者とともに葬られたとありま

¹ <http://meigata-bokushinoshosai.info/index.php?%E7%AC%AC%E5%9B%9B%E3%81%AE%E3%81%97%E3%82%82%E3%81%B9%E3%81%AE%E6%AD%8C%20%284%29>

す。イエス様は罪人として死なれ、葬られました。ユダヤ人議会サンヘドリンのメンバーで、アリマタヤのヨセフが金持ちで、安息日に入る直前に十字架からイエスを取り下ろし、「岩を掘って造った自分の新しい墓に納めた。(マタイ 27:60)」とあります。これらの預言が全て、実際に起こった約700年前のものであるのですから、驚愕です。

2A 苦しみの後の満足 10-12

10 しかし、彼を砕いて、痛めることは主のみこころであった。もし彼が、自分のいのちを罪過のためのいけにえとするなら、彼は末長く、子孫を見ることができ、主のみこころは彼によって成し遂げられる。11 彼は、自分のいのちの激しい苦しみのあとを見て、満足する。わたしの正しいしもべは、その知識によって多くの人を義とし、彼らの咎を彼がになう。

10 節か 12 節は、主のしもべが成し遂げた業を、しもべ自身が振り返って満足しているところです。つまり、主のしもべ、メシヤは生ける者の地から取り去られているのに、なおのこと生きているということです。そうです、福音書には全て、イエスが十字架で死なれて、葬られたら、甦られたことが知るされています。ここの箇所は紛れもなく、メシヤが復活することを預言しているものです。

「主のみこころであった」とあり、「主のみこころは彼によって成し遂げられる」とあります。全てこのことは、神の御心なのだということです。これが、ここのイスラエルの残りの民と同じように驚くべきことでもあります。当時のユダヤ人たちが、自分たちのメシヤとして来られた方を十字架に付けてしました。そして当時のローマが不法にこの方を十字架刑に処しました。今でも、誰がキリストを付けたのかという議論が時々起こります。しかし、それは全く無意味です。もし誰がキリストを十字架に付けたのかということを知りたいのなら、父なる神ご自身なのだということを知りましょう。

ここの「主の御心」は、「主の悦ぶところ」と訳すことのできる部分です。どうして、こんな激しい苦しみを喜ぶことなどできるのでしょうか？それは、ここに書いてあるとおりです。「末長く、子孫を見ることができ」ということです。罪によって滅びゆく者たちではなく、神の子孫が末長く続くということです。ヘブル書に、「イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをもものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。(12:2)」とあります。父なる神だけでなく、主ご自身もこの喜びを抱いておられたのです。すばらしいですね、主はいやいやながら十字架の苦しみをお受けになったのではありません。私たちが罪に定められ、神に裁かれることを神は望まれず、人々がご自身のところに戻ってくるという喜びがあったからこそ、自らご自身の命を与えられたのです。

私たちの喜びはどこにあるのでしょうか。健康でいることでしょうか、財産があって安定することでしょうか。自分の能力が発揮できていることでしょうか。家族が幸せなことでしょうか。自分が神の子どもになっていること、罪によって神から引き離されるのではなく、罪が取り除かれ神と一つになっていることなのではないでしょうか。それこそが、最上の喜びなのではないでしょうか？自分を造

られた神が、私たちの永遠を定めておられます。この方の命と一つにされていることこそが、私たちにとっての喜びでもあるはずです。

そして11節には、多くの人を義とされていると言っています。これこそが、私たちの必要としているものです。神とまっすぐな関係を持っていることが義とされていることです。これをキリストの知識によって、多くの人がそうになっています。私たちは自分のことを自分のしていることで義とされているでしょうか、それとも身代わりのキリストの死、また甦りによって自分を義とされているでしょうか。

12 それゆえ、わたしは、多くの人々を彼に分け与え、彼は強者たちを分捕り物としてわかちとる。彼が自分のいのちを死に明け渡し、そむいた人たちとともに数えられたからである。彼は多くの人の罪を負い、そむいた人たちのためにとりなしをする。

主なる神は、メシヤに多くの人を与えられました。皆さんもし、イエスの名を呼び求めたことによって救われているのであれば、イエス様によっての分捕り物に私たちはなっているのです。私たちという魂そのものが、しもべが神から授かった報酬であります。そして、その理由がやはり身代わり、代償の働きなのです。自分の命を死に明け渡し、それが罪人としての死であったということです。そして、「彼は強者たちを分捕り物としてわかちとる。」とあります。キリストに与えられた分捕り物には、悪の勢力もありました。悪魔を始めとする勢力は、人々を罪の下に閉じ込め、死の恐怖に縛っていました。しかし、主はそれをご自分の死によって打ち砕かれたのです。「コロサイ2:15 神は、キリストにおいて、すべての支配と権威の武装を解除してさらしものとし、彼らを捕虜として凱旋の行列に加えられました。」そして、終わりの日には、地の下にいる者、すなわちこれらの悪魔や悪霊も、そして天にいる者たち、すなわち聖徒たちも、イエスが主であると言い表すと言っています。悪魔は火によって裁かれるために、その告白をし、キリストの身代わりの死によって義とされた私たちは、神を永遠に賛美するため、その救いをほめたたえるために、その告白をします。

そして主は、「そむいた人たちのためにとりなしをする」と言われています。主は、ご自分のなされたことを今も、まだ知らないで神に罪を犯している者たちのためにも届けようとされています。主は忍耐の神です。皆さんがこれまでどんなに気づいていなかったとしても、今も、たった今、この瞬間も執り成しを、父なる神の右の座でしておられるのです。